

## AA 研フォーラム(2012 年 3 月 8 日開催)報告要旨

津田浩司 (AA 研所員)

「ポスト・スハルト期インドネシアにおける「華人の伝統宗教」の現在: 最新の動向、およびその知的源泉に関する若干の考察」

インドネシアでは 1998 年にスハルト体制が崩壊し、従来抑圧的であった華人を取り巻く環境が大幅に改善した。国家による宗教管理の意志も弱まる中、本報告では「華人の伝統宗教」の核と目されてきた寺廟周辺で現在起きている静かな変化に焦点を当てた。

20 世紀初頭、一方では中華ナショナリズムの広がり、他方では華人のキリスト教化が進む状況に対し、プラナカン知識人たちは孔教や三教を「華人の精神的支柱」として概念化・組織化していった。このうち三教は、仏・儒・道の各教えに加え、祖先崇拜や寺廟における神明崇拜を含み込んだ包括的な「華人の伝統宗教」として自らを位置づけ活動を展開してきたが、1960 年代後半に成立したスハルト体制の下では、実質的には寺廟を庇護する宗教団体(公認宗教=仏教の一派)としてしか機能せず、いわゆる宗教活動も停滞を余儀なくされた。しかしスハルト体制崩壊後、孔教が 20 数年ぶりに公認宗教に返り咲き、また寺廟の祭も活性化するなど、宗教全体や寺廟そのものを取り巻く布置関係が大きく変化する中、かつて寺廟を「庇護」していた三教系の団体は、新たな存在意義を求めめるかのような動きを見せ始めている。

本報告では、西ジャワの三教団体、東ジャワの三教団体およびその中ジャワ支部が現在推し進めている儀礼・教義の体系化の動きを概観するとともに、その体系化にあたりそれぞれがどこに知的源泉を求めているかについても紹介した。そしてこれらの動きの現状は、「華人の伝統宗教」の中心は中国や台湾にあり、移住先の社会のものは亜流である、とするような固定的な見方を見事に裏切るようなものであることを示唆した。